

「すみだモデル」に学ぶ 共生社会



羽生施設長

東京都墨田区では7年前から、日本で暮らしながら介護の仕事に就いたり関心のある外国人を、日本語教育を通じて支援している活動がある。本人や事業者の努力だけに任せず、住民ボランティアや大学も連携した地域ぐるみの取り組みだ。

東京都墨田区横川地区の小さな集会所には、毎週金曜日の午後になると国籍も年齢も様々な人たちが集まっている。「すみだ日本語教育支援の会」が開く日本語教室だ。今月8日の教室に訪れていたのは、タイやフィリピン、ペルーを出身国に持つ女性が9人ほど。生まれて間もない赤ちゃんを連れてきた人もいる。みな介護の仕事に就きながら日本で暮らしている。

「今日は仕事？」
「お菓子作ってきたからどうぞ食べてください」
彼女たちが日本語で交わす挨拶や世間話を聞くと、日本人とのコミュニケーション



1人ひとりに合わせて丁寧に指導する一ねん・とすこい倶楽部のメンバー(上)。「金曜日が楽しみ」という講師の中野さん(左)と宇津木さん



地域ぐるみで日本語教育 住民として支え合う意識を

「日本語は『超』がつくほど難解な語学です。でもそのことに実は多くの日本人が気付いていません」
そう話すのは中野玲子さんと宇津木晶さん。2人は早稲田大学大学院で日本語教育を研究。教室では講師を務めている。2人が指摘

「日本語は『超』がつくほど難解な語学です。でもそのことに実は多くの日本人が気付いていません」
そう話すのは中野玲子さんと宇津木晶さん。2人は早稲田大学大学院で日本語教育を研究。教室では講師を務めている。2人が指摘

「今日は仕事？」

「お菓子作ってきたからどうぞ食べてください」
彼女たちが日本語で交わす挨拶や世間話を聞くと、日本人とのコミュニケーション

「今日は仕事？」
「お菓子作ってきたからどうぞ食べてください」
彼女たちが日本語で交わす挨拶や世間話を聞くと、日本人とのコミュニケーション

性4人を介護職として雇ったことに遡る。思いやりが分らないことや質問に溢れ、お年寄りを敬う姿勢など介護の仕事への適性は申し分なし。だが、分かっていないのは、と思い込んでいたことが期待外れの結果となって人間関係がギクシャクしていったり、読み書きができないために単純作業しか任せられない、といった問題が出てきた。

「一人前の介護職としてチームの一員となってもらうためには、継続して日本語を勉強できる仕組みが必要だと思ったのです」
賛育会の特養たちはなホームの羽生隆司施設長がそう振り返る。早稲田大学大学院の宮崎里司教授が共感し「介護職として働き続けるための日本語教室」の開講へとつながった。教える

「外国人が日本で暮らす苦労を初めて理解できるようになりました。それと、介護が誰にでもできる仕事ではないということも。彼女たちに介護を任せられることは、自分の老後の安心になっていきます」(とすこい倶楽部の高橋輝雄さん)
高橋さんらは介護職向けの研修にも参加し、介護の知識や技術を身に付ける努力を重ねている。

「一緒に成長していると感じています。もう外国人や労働力としてではなく、同じ地域の住民だから助け合ふのは当たり前、という意識です」
誰もが小さな日本語教室から始まった地域の変化を喜んでいる。「すみだモデル」は、グローバル社会を豊かにするために、私たちにもできる共生のあり方を隣で見守りながら、とす

「一緒に成長していると感じています。もう外国人や労働力としてではなく、同じ地域の住民だから助け合ふのは当たり前、という意識です」
誰もが小さな日本語教室から始まった地域の変化を喜んでいる。「すみだモデル」は、グローバル社会を豊かにするために、私たちにもできる共生のあり方を隣で見守りながら、とす